

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25511012

研究課題名(和文) フランス・セネガル文学における近代戦争とアフリカ モダニティとしての「未開」

研究課題名(英文) Modern War and Africa in Senegal and French literature : Primitive as a Modernity

研究代表者

吉澤 英樹 (YOSHIZAWA, Hideki)

成城大学・文芸学部・非常勤講師

研究者番号：30648415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：主に第一次世界大戦を契機として西洋の言説場に登場した「かつてないもの」としてのアフリカないしは黒人表象の影響について、日本並びにアフリカの文学(英米仏アフリカ)・人類学・美術史・民族芸術学の専門家と協力し、領域横断的な研究を行った。その結果、近代社会と黒人表象の関係を結びつ大陸横断的な一つの言説場の存在が明らかになった。さらにそのような言説空間において、モダニズムの思想圏から生まれた黒人文化表象が西洋モダニズム芸術家並びにアフリカ人知識人双方のアイデンティティ形成に重要な影響を与えたことを実証することができた。

研究成果の概要(英文)：In order to examine the influence of the cultural representations of Africa or Black People appearing as "unprecedented" in modernist writings, produced mainly after the First World War, we conducted cross-disciplinary research on this matter with experts from Anthropology, History of Art, Aesthetics and French/British/American/ African Modernist Literature from Japan and Senegal. As a result, our study reveals a space for intercontinental discourse that links the cultural representations of Black People to that of Modern Western society. Furthermore, it demonstrates that such representations shared within a contemporary field of discourse have had a critical impact on the construction of identity for both Western Modernist artists and African intellectuals of this era.

研究分野：フランス語圏文学・文化研究

 キーワード： 間大陸の黒人表象 モダニズム 植民地行政 第一次世界大戦 プリミティブ・アート 国際研究者  
 交流(セネガル) セネガル狙撃兵 インターナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦勃発から100年という節目を迎え、人文・社会科学分野で近代戦争の意味を問い直す研究プロジェクトが様々なところで進められていた。一方で、申請者は戦争詩を出発点として両次大戦間に活動を行っていた作家に焦点を当て戦争とモダニズム芸術の関係についての研究に区切りをつけようとしていた。そこでは、ある面でフランスの戦後芸術とは「かつてないもの」を競って志向するモダニズムであり、それが大量殺戮のテクノロジーが導入された近代戦争におけるモダンと地続きになっていることを明らかにすることができた反面、テクノロジーに由来するモダンとは対極的なプリミティヴィズムやエキゾチズムといった、また別種のモダンの表象が戦間期に顕著に見られる理由を説明することが課題として残されていた。

そこで、本研究では、戦争を介在した「未開」のイマジネールとそこに付随するある種の「モダニティ」の実相と来歴を明らかにするため、フランス第三共和制の植民地行政の帰結、あるいは象徴ともいべき「セネガル狙撃兵」と呼ばれる第一次世界対戦中にヨーロッパの戦場に投入されたアフリカ黒人植民地兵の表象と戦後モダニズム芸術の関係をフランスおよびセネガル文学双方の視点からの分析を思い立った。

しかし、当該の主題は旧来の文学・思想史研究の枠に収まるものではないゆえ、モダニズムという一種美学的な概念を正しく言説内に定位させる必要があった。それゆえ、レーモン・ルーセルなど20世紀モダニズム文学研究を専門とする一方でマルセル・デュシャンなど当時のモダニズム芸術について美学的研究を進めていた北山研二(成城大学教授)と、文学だけではなくフランス語圏のポスト・コロニアル研究にも造詣の深いセネガル人研究者であるラファエル・ランバル(セネガル・ジガンショール大学専任講師〔当時〕)に協力を求めた。その上で、フランス・モダニズム芸術の主題のひとつである「未開」観をフランス内部およびセネガルという外部の視点から分析することによって、独自の論点を提示しながら、当時の「モダン」という概念の非同心円的な諸相を明らかにし、現行のモダニズム研究に対して新たなヴィジョンを描出したいと考えた。

## 2. 研究の目的

以上のような方向性を確認した上で、本研究は、共同並びに分担作業を進めることによって、以下のような実証的研究並びに理論的研究における目標を掲げた。

まずは実証・実例的研究としてはフランス戦争文学における「未開」の表象の研究、フランス戦後のモダニズム芸術における「未開」についての批判的研究、さらに同時期の

セネガル人が書いた作品における黒人植民地兵の表象を対照的に分析することによって、第一次世界大戦を契機に形成されていく「未開」と「モダニティ」に関する新たな協働関係の流れを当時の言説空間を探索することにより、重層的に理解することを目的とした。

また上記の実証研究による成果を踏まえて、当時の「未開」と「モダン」の関係をヨーロッパの思想史の枠組みに位置付ける一方で、それらを内面化したアフリカ人の文化戦略を解明するとともに、戦後フランス・モダニズム芸術における戦争を介在した「未開」と「モダン」の関係を美学的・表象文化論的な視点から再構成することを目指した。

## 3. 研究の方法

以上のような目標を設定して、具体的には、研究分担者・協力者と打ち合わせを行いながら、研究期間中に7回の研究会と1回の国際シンポジウムを開催することによって異なる分野の専門家たちとディスカッションを通して共同研究を進めることになった。

当初は上記3人の共同研究として進めていたが、研究会の開催を経て、「未開」と「モダニティ」という概念の協働の生成を解明するためには、当時の植民地行政やそこから生まれた最新の学知であった民族誌学に関する知識、また20世紀初頭民族誌学や政教分離を推し進める第三共和制下に生まれたモダン・アートとアフリカの宗教的器物との関係の解明、また第一次世界大戦中に兵士として参加したアフリカ黒人とアメリカ黒人の関係などを解明することが不可避となった。そのため、当該主題を解明するためには人類学・民族芸術学・英米文学といった専門家たちとの共同による学際的な視点を採用し、研究対象となる地理的枠組みと時代的枠組みを広げた上で、フランスとその植民地に由来する文化事象とモダニズムの関係を解明する作業を進めた。それに伴い、研究年度の途中に美学・民族芸術学を専門とする柳沢史明(東京大学助教)並びに英語圏文化・文学専門の三宅美千代(慶應義塾大学非常勤講師〔当時〕)を新たに研究分担者として加え、研究班を再組織し、より学際的・重層的な共同研究を進めた。

## 4. 研究成果

再編成された研究班によって進めた共同研究は、上記の研究会とシンポジウムによって漸次その成果を発表し続けたが、討議を経てそれらに修正を加えた原稿を成果論集の形で2015年10月に出版し、「間大陸的黒人文化表象」並びに「ブラック・モダニズム」という本研究を象徴する新たな概念を提出した。20世紀初頭の植民地行政やモダン・アートにおける黒人(文化)表象を出発点とし、第一次世界大戦を経てフランス語圏の言説空間に登場した黒人植民地兵の自他表象、ま

た 1930 年代におけるフランス人とアフリカ双方ならびにアングロサクソン圏における文化表象の視点から「モダン」と「未開」の関係の問い直し、さらに第二次世界大戦後における「ブラック・モダニズム」が持ちえたアクチュアリティまで、当初よりも広範な地理的・時間的枠組において、第一次世界大戦後に顕在化した黒人文化表象とモダニズムの関係の来歴と行く末を美学・英米仏アフリカ文学・文化人類学といった様々な分野の専門家と共同した学際的な視点によって明らかにすることができた。

また出版後は、2015 年 11 月京都大学で行われた日本フランス語フランス文学会秋季全国大会のワークショップにおいて研究分担者の三宅美千代と柳沢史明とともに、共同研究の成果の周知とともに、それぞれドイツ（クレール・ゴル）、ベルギー（フランツ・エラン）、イギリス（ナンシー・キュナード）といった他のヨーロッパの言語圏出身者でありながら 1920 年代にフランスで活動した作家を取り上げ、黒人文化表象とモダニズムの関係について、同時期のそれぞれの国の固有の事情を反映させた言説間の偏差を明らかにする共同研究発表を、成果論集の補完という形で行った。

また研究代表者の吉澤は、上記のワークショップを含め、研究期間中は毎年、日本フランス語フランス文学会の 20 世紀文学の分科会で研究発表を行った。そこでは 1920 年代におけるフランス人作家の他者理解の実践を通して、当時の政治文化的文脈の影響を受けながらアフリカ黒人をモダンの象徴として捉える様々な視点を提示した。それらは、学会誌に掲載されているが、加筆の後、いずれ単著という形で出版を試みたい。

さらに研究期間延長後の最終年度であった平成 28 年は、研究成果を周知させる一環として、周辺テキストの翻訳を進め出版を目指した。年度中には、(旧)研究分担者(所属研究機関の変更により平成 28 年度は研究協力者に戻った)三宅美千代の翻訳により、1920 年代のアメリカ・ニューヨークのモダンな黒人文化を描いたカール・ヴァン・ヴェクテンの小説『ニガーヘヴン』(未知谷、2016)を出版することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

吉澤英樹、モダンの表象としての「外交官＝作家」像の虚実 米『ヴァニティ・フェア』誌に掲載されたフランス人作家ポール・モランの記事をめぐって、成城文藝、査読なし 237/238、2016、pp.62-79。  
柳沢史明、Représentations des Noirs à travers le « rythme » : les images panafricaines apportées par les « arts nègres

», Université Assane Seck de Ziguinchor, « Cahiers du CREILAC », n° 1, 査読あり、2015、pp.37-54

三宅美千代、D・H・ロレンスとハーレム・ルネサンス、(図書所収論文)査読なし、国書刊行会、2015、pp.133-150

吉澤英樹、L'《après-guerre》chez Jean-Richard Bloch dans *Première journée à Rufisque: Incarnation du «proletariat»* chez les Africains subsahariens、フランス語フランス文学研究、107、査読あり、2015、pp.137-152。

吉澤英樹、後衛作家が捉えたモダニティ：レーモン・エスコリエ『ママドゥ・フォファナ』(1928)における「セネガル狙撃兵」の表象を巡って、フランス語フランス文学研究、105、査読あり、2014、pp. 235-251。

[学会発表](計 14 件)

吉澤英樹、外交官僚エリートと黒人 ポール・モラン『黒い魔術』(1928)における保守的文化相対主義、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会研究発表、2016 年 10 月 22 日、東北大学川内キャンパス(宮城県)

吉澤英樹、クレール・ゴルの黒人小説と「シュルレアリスム」、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会ワークショップ、2015 年 11 月 1 日、京都大学吉田キャンパス(京都府)

三宅美千代、「生けるネットワーク」としてのナンシー・キュナードーアンソロジー『ニグロ』に収録されたシュルレアリスム関連のテキスト群、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会ワークショップ、2015 年 11 月 1 日、京都大学吉田キャンパス(京都府)

柳沢史明、アフリカ彫刻へのある親密なる愛情-F・エラン『バス・バシナ・ブル』におけるプリミティヴィズム、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会ワークショップ、2015 年 11 月 1 日、京都大学吉田キャンパス(京都府)

三宅美千代、ナンシー・キュナードの帰郷体験、日本ロレンス協会第 46 回大会シンポジウム《「帰郷」という危機》、2015 年 6 月 27 日、愛知大学(愛知県)

北山研二、言語とアートの国境は何か?、パリ第 8 大学アート＝ヒューマン・メデイエーション高等研究所・新旧図像に関する美学的認識純理学的研究国際ショナルセンター後援、「言語の国境」国際シンポジウム、2015 年 3 月 17 日パリ第 8 大学(フランス、パリ市)

吉澤英樹、「Deux tirailleurs vis-à-vis de l'Histoire: Bakary Diallo Force-Bonté(1926) et Lamine Senghor, *La Violation d'un pays* (1927)」、国際シンポジウム「臣民」から「主体」へ フランス語圏を中心とした

両次大戦間の黒人表象をめぐって、2015年2月1日、成城大学（東京都）

三宅美千代、“Passing Theme in Interwar Arts and Racial Identity Discussion”、国際シンポジウム「臣民」から「主体」へフランス語圏を中心とした両次大戦間の黒人表象をめぐって、2015年2月1日、成城大学（東京都）

柳沢史明、「Représentations des noirs à travers le "rythme": les images panafricaines apportées par les "arts nègres"」、国際シンポジウム「臣民」から「主体」へフランス語圏を中心とした両次大戦間の黒人表象をめぐって、2015年2月1日、成城大学（東京都）

Raphaël LAMBAL、「Statut et image des tirailleurs sénégalais dans la Grande guerre(1914-1918) au miroir de la littérature」、国際シンポジウム「臣民」から「主体」へフランス語圏を中心とした両次大戦間の黒人表象をめぐって、2015年2月1日、成城大学（東京都）

吉澤英樹、「最初の日、リュフィスクにて」(1926)におけるジャン=リシャール・ブロックの戦後 受肉した「プロレタリア」としてのアフリカ黒人、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会研究発表、2014年10月25日、広島大学（広島県）

吉澤英樹、「戦争詩」から「自伝ノオートフィクションへ」「生表象」の帰属と文学性の問題について、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」、2014年2月1日、一橋大学（東京都）

吉澤英樹、「友人」としてのセネガル狙撃兵 レイモン・エスコリエ『ママドゥ・フォファナ』(1928)を中心に、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会研究発表、2013年10月26日、別府大学（大分県）

吉澤英樹、「ブレ・ネグリチュード期におけるセネガル狙撃兵の自己表象 バカリ・ジャロ『善意の力』(1926)をめぐって 成城大学フランス語フランス文化研究会第14回研究発表会、2013年6月29日、成城大学（東京都）

#### 〔図書〕(計3件)

吉澤英樹(編)、ブラック・モダニズム 間大陸的黒人文化表象におけるモダニティの生成と歴史化をめぐって、未知谷、2015年、315 p.

吉澤英樹、*Pierre Drieu la Rochelle - Genèse de sa "voix" littéraire (1918-1927)*、L'harmattan、2015年、342 p.

北山研二、*L'art, excès & frontières*、L'harmattan、2014年、136 p.

〔その他〕

ホームページ

<http://d.hatena.ne.jp/Senegal1926/>

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

吉澤英樹 (YOSHIZAWA Hideki)  
成城大学・文芸学部・非常勤講師  
研究者番号：30648415

##### (2)研究分担者

北山研二 (KITAYAMA Kenji)  
成城大学・文芸学部・教授  
研究者番号：90143130

柳沢史明 (YANAGISAWA Fumiaki)  
東京大学・人文社会系研究科・教務補佐員  
研究者番号：10725732  
【平成27年度より】

三宅美千代 (MIYAKE Michiyo)  
慶應義塾大学・法学部・非常勤講師  
研究者番号：50434246  
【平成27年度】

##### (3)海外研究協力者

ラファエル・ランバル (LAMBAL Raphaël)  
セネガル・ジガンシヨール大学・  
人文学部・専任講師

##### (4)研究協力者

江口祥光 (EGUCHI Yoshimitsu)  
成城大学・文芸学部・非常勤講師

小川了 (OGAWA Ryo)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・名誉教授

木水千里 (KIMIZU Chisato)  
お茶の水女子大学・グローバルリーダーシップ研究所・特別研究員

立花史 (TACHIBANA Fuhito)  
早稲田大学・文学部・非常勤講師

山口哲央 (YAMAGUCHI Norio)  
共立女子大学・文芸学部・非常勤講師